

はつめこ

少子高齢化が進み、夫婦のみや単身の世帯が多数をなす地域社会が一般化してきている。都心部では、その傾向がいち早く顕著に現れてきている。また、社会・経済のグローバル化とともに、人口の国際化も急速に進んでいる。これもまた都心部においていっそう顕著である。地域社会を構成する基礎単位の質・量自体が激変してきている。そこに意識を向けることなしに、現代そしてこ

大阪・上町台地発
都心居住文化の創造へ
(第13話)

地域資源情報による コミュニケーション・ エンパワーメントの可能性(1)

れからの地域社会やまちづくりを展望することはできないだろう。

個を基点とした他者との新たなつながりのデザインを切実に必要とする時代を、現代の生活者は生きているといつてもいい。ソーシャル・キャピタル(安心や安全を支える信頼関係や生活文化)の再構築に際して、地域社会のあらゆる場面で、異なる価値観を受容する多文化共生の姿勢は欠かせないものとなる。と同時に、変化が激しく、個人化や孤立化が進行する社会であればあるほど、地域の記憶や知恵を蓄積・共有していく文化装置や、ゆつく

りとして変化しない自然や幾世代にもわたる時を重ねた歴史や生活文化といったものが、人々の支えやつなぎ手、いわばネットワークの媒介としての価値を発揮し得るものともなる。

当連載第11話で紹介した、地域資源データベース「上町台地 cocoro」は、地域でのイベントやイベントに関わる地域資源情報への注目の喚起を入り口に、居住地としての都心への愛着を育み、ひいては都心居住の主体の形成を促していくインターフェイスとして活用されることを目指している。産学地域協働で開発したインターネットに

弘本 由香里

written by Yukari Hiromoto

よる情報システムである(1)。また、続く当連載第12話で紹介した、大阪ガス実験集合住宅NEXT21/UCoRoプロジェクトは、建物一階の小スペースのガラス・ウォール(ウィンドウ)を活用し、地域資源にまつわる展示を中心として、小冊子の発行や関連イベントの開催を連動させた情報発信の取り組みである(2)。地域で活動する多様な主体や地域資源間のネットワークの拡張を主目的とし、あわせて地域資源への関心の喚起や地域資源を活用した活動への参加を促す、街角からのリアルな地域コミュニケーションデザイン実験である(図1)。

当連載第13話・第14話の「回を通して」上町台地 cotocoto,

とU・CoRoの関係の起点としながら、情報メディアとしてのU・CoRoの特徴を捉えるとともに、地域資源情報によるコミュニケーション・エンパワーメントの可能性について考えてみたい。なお、「上町台地 cotocoto」は、当連載第11話でも触れているとおり、同志社大学大学院総合政策科学研究科新川研究室+山口研究室、京都大学大学院工学研究科居住空間学講座(高田・神吉研究室)、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所(筆者所属)による共同研究に「上町台地からまちを考える会」による運営協力及び、(株)縁人による技術開発の参画を得て実現した産学地域協働の実践研究プロジェクトである。また、U・CoRoプロジェクトは、当連載第12話でも触れているとおり、NEXT21第3フェーズ居住実験の一環で、新たに導入した地域コミュニケーションデザイン実験として、大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所を主体に、企画・制作を担うワーキングメンバーや地域住民をはじめとする多様な協力者、評価に関する共同研究の担い手としての京都大学大学院工学研究科居住空間学講座(高田・神吉研究室)との協働によって進められている取り組みである。

始動から約一年の現段階におけるU・CoRoプロジェクトの評価に関する共同研究の成果の一部を、京都大学大学院工学研究科居住空間学講座博士前期課程の柴田尚子氏が、修士論文「大阪都心部における地域資源の情報収集及び発信活動に関する研究 上町台地境界におけるU・CoRoプロジェクトを通じて」(二〇〇八年二月)にまとめている(図2)。当連載第13話では、本稿後半で柴田氏の修士論文の一部を抜粋しながら、筆者の私見も交えつつ、U・CoRoプロジェクトをめぐる共同研究のトピックスを簡単に紹介する。紙幅の都合で断片的な紹介となってしまうことを、あらかじめお詫びしておく。

「上町台地 cotocoto」から「U・CoRo」へ

U・CoRoプロジェクトの評価に関する共同研究の成果の一部を紹介する前に、「上町台地 cotocoto」とU・CoRoの関係の起点とした、情報メディアとしてのU・CoRoの特徴を簡単に捉えておきたい。かたやインターネットというヴァーチャルなメディアを使ったアプローチ、かたや即地的な空間での展示というリアルなアプローチという明瞭なスタイルの違いがある。しかし、いずれも新たなつながりのデザインを志向した、社会実験としての試みであり、地域の記憶や知恵を蓄積・共有していく文化装置として、つなぎ手となる地域資源情報に着目していることに変わりはない。また、両者の企画・運営には、共通の主体がさまざまな形で関わっており、先行して開発された「上町台地 cotocoto」の現段階での弱みを補完する機能が、U・CoRoプロジェクトの実現過程でおのずと意識されてきたという相互関係がある。

例えば、「上町台地 cotocoto」は、その開発コンセプトにおいて、イベント情報と地域資源情報の相乗作用を意図し、地域活動への参加促進に始まり、やがては地域活動の担い手が生まれ育っていく、循環型のシナリオを想定している。とはいえ、現実にはそうした動きを呼び起こし、その実感を共有できるレベルに到達することは容易ではない。第11話の終わりで、筆者は「上町台地 cotocoto」の今後の課題について次のように述べている。

その役割を果たしていくには、生活に身近な都心居住支援のためのデータベースとしての、利用者・担い手の支持と広がりが必要である。研究会の議論では今後に向けて次のようなポイントが確認された。新・旧住民そ



図1 上町台地に立地する、大阪ガス実験集合住宅NEXT21の1階に設けたU・CoRo(上町台地コミュニケーション・ルーム)のガラス・ウォールを活用した地域資源情報の展示風景(大阪市天王寺区清水谷町)

大阪都心部における地域資源の情報収集
及び発信活動に関する研究
上町台地界隈における
U-CoRoプロジェクトを通じて



柴田 尚子
(京大大学院工学研究科博士前期課程)

U-CoRoプロジェクト運営へのオブザーバー参加のほか、地域資源の掘り起こし作業(2002年)や地域資源データベース(上町台地.cotocoto)の開発(2007年)など、上町台地界隈での一連の実践的協働研究プロジェクトに関わってきた

第1章 序論

- 1-1 研究の背景と目的
- 1-2 研究の方法と構成
- 1-3 研究対象の概要

第2章 上町台地界隈における地域資源の
情報収集及び発信活動の必要性

- 2-1 都心居住における地域資源の情報収集及び発信活動
- 2-2 上町台地界隈における地域資源の現状
- 2-3 上町台地界隈における地域資源情報の発信活動の現状
 - (1) 上町台地.cotocoto
 - (2) U-CoRoプロジェクト
- 2-4 上町台地界隈における地域資源の情報収集及び発信活動の位置づけ

第3章 U-CoRoプロジェクトの活動プロセス
から見た地域資源の情報収集及び
発信活動

- 3-1 U-CoRoプロジェクトの活動プロセス
- 3-2 U-CoRoプロジェクトの活動プロセスにおける活動主体と地域資源の関わり
 - 3-2-1 U-CoRoプロジェクトの活動主体の属性
 - 3-2-2 ヒアリング調査概要
 - 3-2-3 情報収集プロセスにおける活動主体と地域資源との関わり
- 3-3 活動プロセスから見た地域資源の情報収集及び発信活動の意義

第4章 実験集合住宅NEXT21居住者と
地域資源との関わりから見た
情報収集及び発信活動の有効性

- 4-1 アンケート調査の概要
- 4-2 NEXT21居住者とU-CoRoプロジェクトとの関わり
- 4-3 NEXT21居住者と地域資源との関わり
- 4-4 NEXT21居住者と地域資源との関わりから見た分析
- 4-5 NEXT21居住者と地域資源との関わりから見た情報収集及び発信活動の有効性と課題

第5章 結章

- 5-1 結論
- 5-2 今後の課題

「上町台地.cotocoto」では、まだ手つかずの状態にある前記のような課題を、別のスタイルで並行しながら引き受け実現していこうとしているのがU-CoRoプロジェクトであるといってもいいかもしれない。地域の記憶や知恵を蓄積・共有していくためには、欠かせない価値共有のための要件がある。「地域資源の掘り起こし」、「時間と空間、体験の共有」、「多様な価値(観)の受容」、「不

れぞれの視点、あるいは上町台地に暮らしてはいるものまちづくりに参加しない人々の視点、さらにはデジタル・デバイドの現実などを意識しながら、ポータリティ(窓口性)やアクセスビリティ(接続可能性)を高めていく知恵が求められること。例えば、現在のサイドAとサイドBの二面からなる構造に、日常の魅力を物語るサイドCや地域の知恵を集約するサイドDなどを加え、幅を広げていくことも、今後の展開の可能性の一つだろう。誰もがまちの物語の立て役者であることを、まちを舞台に体現するきっかけを得る身近な道具になり得るかどうかが、地域資源データベースを活用した地域コミュニケーションデザインの鍵といえそうだ。

情報収集プロセスへの関わりに着目して

易と流行の共存」といったプロセスをとる必要である。実は、それらの価値共有のプロセスのデザインこそ、「上町台地.cotocoto」がまだ達成できていない課題であり、U-CoRoで意図されている地域コミュニケーションデザインの鍵と考えてもいい。言い換えれば、U-CoRoが持つリアルなメディアとしての制約条件は、むしろ前記のプロセスをとる必要要件に対して、ヴァーチャルなメディアよりも、容易にポジティブに作用しやすいという点に大きな特徴があり、その特徴を活かそうとする実験がU-CoRoプロジェクトであるといえる。また、そのプロセスそのものや検証された成果を、「上町台地.cotocoto」はもちろん、上町台地界隈のまちづくりに関わる多様な活動主体へフィードバックしていく必要性を認識した取り組みでもある。

地域コミュニケーションデザインにおける価値共有のプロセスの必要性を理解したうえで、U-CoRoプロジェクトにおける展示やイベントのための地域資源の情報収集プロセスの重要性が浮かびあがってくる。柴田氏は修士

図2 研究に取り組む柴田尚子氏(写真)と修士論文目次

論文「大阪都心部における地域資源の情報収集及び発信活動に関する研究 上町台地界隈におけるU-CoRoプロジェクトを通じて」の中で、「U-CoRoプロジェクトで扱う地域資源の情報は、○○○○と比べ、個人が地域資源とどのように関わっているのか、その関わり方が含まれていることに意味がある」と述べ、具体的な情報収集のプロセスを追いながら、次のようにその意味を見出ししている。

それは情報収集プロセスにおいて、取材により地域資源と積極的に関わっている個人から地域資源に関するエピソードや写真、資料など地域資源との関わり方の情報を収集し、それを編集し発行することで可能になっている。またそのプロセスの中で、個人が情報を提供しU-CoRoプロジェクトの活動主体となることで、その個人自体も新たな地域資源との出会いがあり、そこからまた自身の地域資源との関わりに新たな展開が生まれつつある。それに加えて、展示内容に基づくイベントにより地域資源と積極的に関わっている個人やそのテーマ内容に関心のある個人が実際に出会う場を提供することで、地域資源と積極的に関わっている個人がどのように関わっているのかどのような人なのかを知ることが可能である。

結果として、「地域資源の情報収集のプロセスを重視した発信活動を行うことで、個人が地域資源と関わりを持つ機会を創出できる。また、現在あるその他の地域資源情報との発信活動と相乗効果が生まれる」というわけである。

そこで、地域資源の情報収集プロセスに着目したU-CoRoプロジェクトの現段階における評価について、先に触れた共同研究に基づいて実施された、関係者へのヒアリング調査の一部とNEXT21入居者へのアンケート調査の結果をもとに、柴田氏の修士論文から要点を簡単に紹

介しておきたい。ヒアリング調査の対象者は、情報提供の主体（活動主体）として展示などの活動に何らかの関わりを持った立場にあり、一方、アンケート調査の対象となったNEXT21入居者は、最も身近な情報の受け手ではあるが、現時点で展示などへの主体的な関与はない立場にある。調査手法は異なるものの、それぞれの調査結果を比較することによって、情報発信プロセスへの関わりの意味や課題をある程度把握することが可能と考えられる。

情報提供の主体へのヒアリング調査から

U-CoRoプロジェクト発足後約一年間に、展示などの際に情報提供の主体（活動主体）として関わった約四〇名へのヒアリング調査は、大阪ガス株（エネルギー・文化研究所）から、U-CoRoプロジェクト・ワーキングのメンバーで、地域の活動者からの情報収集を中心的に担っている早川厚志氏に委託し実施しているところである。そのうちの〇〇名について柴田氏が同行調査（二〇〇七年一月〜二月に実施）し、修士論文の中で、情報収集プロセスに着目した分析を行っている。詳細な紹介は次回に譲りここでは割愛するが、ヒアリングを通して把握した関係者の意識と行動から、情報収集プロセスを重視した発信活動について、次のような意義が改めて確認されている。

U-CoRoプロジェクトの活動主体となることで新たな地域資源との関わり方を知ったり、自身の地域資源との関わり方を伝えたりすることができる。それにより自身の行っている活動の拡大の契機として考えたり、新たな活動に参加したりする事例が見られた。このような情報収集プロセスを踏むことで、その後の情報発信活動の質が高まると同時に、イベントという手

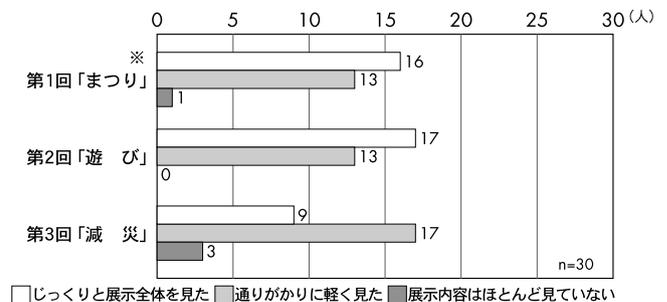


図3 U-CoRoでの展示の視認度

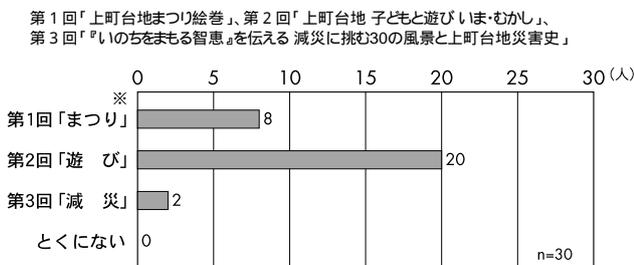


図4 U-CoRoの展示企画で最も興味を持ったテーマ

法での発信活動においても活動主体が関わることで、地域資源と積極的に関わっている個人また関心のある個人と地域資源の関わり方に関する情報交換が可能となる。それにより、今後地域資源と関わる上での展開方法や人材を得ることが可能となる。

ヒアリング結果の背景に、U-CoRoプロジェクトへの協力を引き出す力として、地域資源を活かした活動を積極的に展開する複数の組織で構成されている「上町台地からまちを考える会」とその関係者間で築かれてきた信頼関係がある。その信頼関係が、目に見えないプラットフォームの役割を果たしていることは見逃せない事実として存在している。一方で、地域資源情報の提供に関しては、個人的な活動を繰り返している活動者のみならず、その地域で長く暮らししてきた住民の方々が大きな存在感を發揮し、魅力的な発信者、情報提供の主体になり得ることもまた事実として確認できた。U-CoRoプロジェクトは、これまで接点を設けにくかった、両者を結ぶ新たなネットワークの回路を生み出す「コミュニティ・エンパワーメントの可能性をつかがわせてくれている。」この点については、次回連載第14話で、約40名のヒアリング結果を踏まえて詳しく報告することとする。

そのほか、ヒアリングでは消極的なコメントも複数あり、情報の循環や応答性を高めていく工夫が必要であることも明らかに感じ取れる。

NEXT21入居者へのアンケート調査から

情報提供の主体として関わった活動者に対して、情報の受け手としてU-CoRoを最も身近に眺めているNEXT21入居者一六世帯(二〇〇七年四月から入居、前居住地は近畿圏内)のうち成人三〇人を対象に、U-CoRoプ

プロジェクトの評価に関するアンケート調査を行った(二〇〇七年一月に実施)。先に触れたとおり、共同研究として実施したものであるが、その結果の一部を柴田氏の修士論文から簡単に紹介する。

NEXT21入居者とU-CoRoプロジェクトの関わりについては、「展示をじっくり見ている」「または「通りがかりに見ている」「入居者が大半を占めている。最も興味を持った展示企画については、「第2回の「子どもと遊び」をテーマとする展示が最も多い。自由記述から、「上町台地の昔のエピソードが取り上げられていて興味を持った、自分が知っている場所に関するエピソードが取り上げられていて興味を持った など、個人と地域資源の関わり方に興味を引かれた居住者がいた。また、祭りの内容と時期が分かることで参加・訪問動機が増えるため」という回答があり、地域資源との関わり方のきっかけとなりうる事が分かる(柴田(図3、4))。

展示に連動したイベントへの参加状況については、参加者はごく少数ではあるものの、参加動機として自由記述から、自分も地域まちづくりに関する仕事をしており、共有の関心を持つ人が集まると思ったので(結果として知人ができた)、「U-CoRoプロジェクトの趣旨などを知る絶好の機会だった」、「子どもにとって(なかなかできない体験なので)といった意向が見られる。

少数ではあるが展示を介して得た情報を活用した入居者には、「三光神社の夏祭りを見物した」、「子どもと公園に散歩に行った」、「地域を散策した」といった自由記述がある。「また、展示で得た情報による意識の変化に関しては、

入居理由に「この地域に住みたかった」を選択していない居住者が、自由記述で「古くから歴史のある地域だと知りもっと深く関わってみたいと思った」「石段や石畳など風情のある場所があることに気付かされた」など上町台地

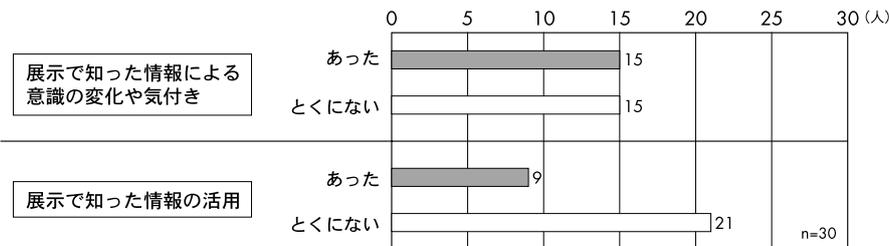


図5 U-CoRoの展示から得た情報による気付き・情報の活用

境界の地域資源を認識し、新たに関心を持ったことが見られる」(柴田)。

また、「地域活動に関心がなく参加していない居住者一名が、入居時はU-COROPプロジェクトに関心がなかったが、本アンケート調査時には、U-COROPプロジェクトに対して関心が出てきている。また、両者ともに知人に展示のことを教えたことがある点や、今後機会があればU-COROPプロジェクトの展示に関する情報提供をしてみたいと答えた点などからも関心の高まりがうかがえる」(柴田)。

発信した情報の内容が地域資源への関心の喚起にある程度の影響を及ぼしていることは確認できるものの、情報の受け手が情報収集プロセスに参加していくためのインターフェイスが整っていないため、情報提供の主体への転化と、ネットワークの拡張の可能性を阻んでいるのではないかということが推測できる(図5、6、7)。

第一三話の終わりに

前記のヒアリング調査とアンケート調査によって、情報収集のプロセスに関わり情報提供の主体となった場合には、新たな思考や行動、ネットワークの拡張の兆しが生まれやすいのに対して、情報の受け手のみの立場にある場合には、同様の兆しは生まれにくい状況をうかがうことができた。情報の受け手から情報提供の主体への転化を可能にするインターフェイスとしての、情報収集プロセスを創造する必要性が認められる。柴田氏が課題として指摘しているように、「展示内容において具体的なエピソードに興味を引かれた居住者が何例かいること、また活動の背景にある情報収集プロセスの意図があまり把握されていないことなどから、情報収集プロセスをさらに展示に反映させる工夫を行うことも必要である」(柴田)。

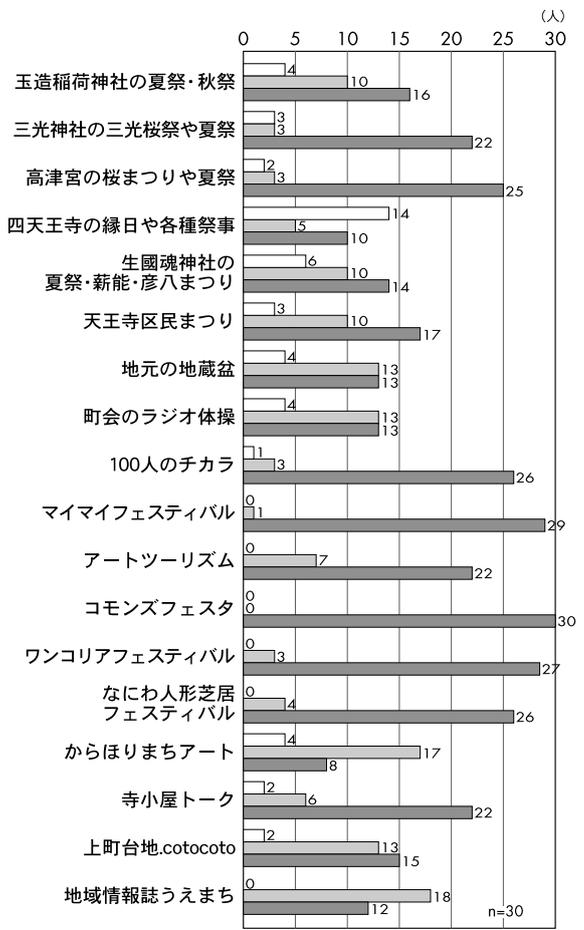


図6 上町台地境界で開催されている行事や情報発信の認知度

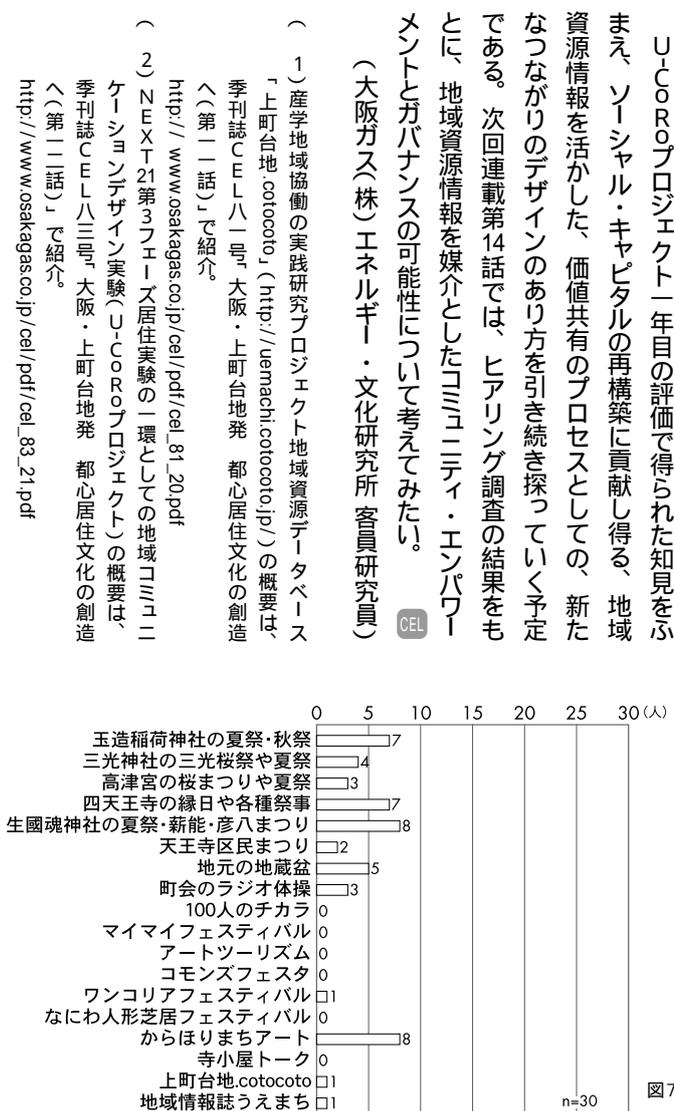


図7 上町台地境界で開催されている行事や地域メディアへの参加・利用

U-COROPプロジェクト一年目の評価で得られた知見をふまえ、ソーシャル・キャピタルの再構築に貢献し得る、地域資源情報を活かした、価値共有のプロセスとしての、新たなつながりのデザインのあり方を引き続き探っていく予定である。次回連載第14話では、ヒアリング調査の結果をもとに、地域資源情報を媒介としたコミュニティ・エンパワメントとガバナンスの可能性について考えてみたい。

CEL (大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所客員研究員)

- (1) 産学地域協働の実践研究プロジェクト地域資源データベース「上町台地.cotocoto」(http://uemachi.cotocoto.jp/)の概要は、季刊誌CEL 81号、大阪・上町台地発 都心居住文化の創造 (第一話)で紹介。
http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel_81_20.pdf
- (2) NEXT 21 第3フェーズ居住実験の一環としての地域コミュニティ ショーンデザイン実験(U-COROPプロジェクト)の概要は、季刊誌CEL 83号、大阪・上町台地発 都心居住文化の創造 (第二話)で紹介。
http://www.osakagas.co.jp/cel/pdf/cel_83_21.pdf